慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スウィフトと田園賛美の思想について
Sub Title	Swift and his outlook on rural life
Author	海保, 真夫(Kaiho, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1980
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.40, (1980. 9) ,p.127- 143
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集・ 文学と都市
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00400001-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スウィフトと田園賛美の思想について

海保真夫

(1)

十八世紀末に興り、十九世紀に支配的な文学観となるロマンティシズムは、前代の古典主義文学を継承したというより、むしろこれに叛逆したものとして従来説明されてきた。しかもその文学的事績がきわめて目覚ましかっただけに、文学史家はロマンティシズムの長所を賞揚するにあたって、まず古典主義文学の諸特徴に否定的評価を与えてから論述するのが通例である。たとえば都会と自然の対比が強く意識されたのもロマンティシズムの時代においてであるが、この場合も、古典主義が都会偏重の文学であるのにたいして、ロマンティシズムは自然に新たな目を向けており、そこに後者の大きな意義があったと説かれている。十八世紀古典主義文学をはじめて本格的に論じた夏目漱石にしても、やはりこうした在来の文学史観を免れ得なかった。彼はその著『文学評論』において、「私はあながちに都会の空気を非難する積はない」と繰り返し主張しながらも、ジョゼフ・アディスンやサー・リチャード・スティールの〝浅薄さ〟を都会の空気に災いされたものと断じている。また、ジョナサン・スウィフトといえば、漱石がもっとも強い共感を示した

文人であり、一般に外国人作家にたいして個人的傾倒を露わにするのを拒んだ漱石にしては珍しい事例であるが、しかもなお彼は、スウィフトの主著『ガリヴァ旅行記』を評するにあたって、「自然の享楽を表はした点が少しも無い。彼様に所々方々を漂流して歩いたのだから、少しは海の色、浪の音、又は飛ぶ鳥の具合や空模様、偖は山や川や田園の景色でもよいから、賞翫の態度を以て記載したら可からうと思ふに、そんな事は一向無頓着である。只朝の何時に船が出た、何年何月の何日に何処へ着いたと云ふ様な、実用的に精確な記載ばかりであるのは、いささか遺憾である」と述べて、描写の姿勢を批判しているのである。

もっとも、『文学評論』一冊の存在をもって、漱石を十八世紀古典主義文学の推奨者とみなすのは誤りかもしれない。このことは、『愛読せる外国の小説戯曲』という談話で、自分は十八世紀文学に特に関心があるわけではないと語っていることからも推測できるし、それに漱石の場合、むしろロマンティシズムの傾向が色濃かったことは、『幻影の盾』、『薤露行』など、初期の作品が物語っているからである。

もちろん古典主義とロマンティシズムが互いに対照的な特徴を有し、ロマン派の作家たちが古典主義にたいして対立意識を抱いたのは事実である。だが、古典主義を都会偏重、ロマンティシズムを田園賛美と安易に断定して、前者から後者への推移を文学史上の大きな発展と評価するのは、あまりにも単純な解釈といえないだろうか。ロマンティシズムの時代といえども、都会の子をもってみずから任じたチャールズ・ラムの例があり、また田園作家に露骨な軽蔑を示したアイザック・ディズレイリーも存在する。そればかりではない。ロンドンを呪咀したシェリーの『ピーター・ベル三世』やバイロン卿の『ドン・ジュアン』の詩句にしても、その力強さはむしろ都会にたいする強い関心に裏打ちされているのである。結局、文学作品のそうした力強さは、作家が俗事に深いかかわりを持ち、いわばその塵埃にまみれたと

ころに生ずるのであって、古典主義あるいはロマンティシズムを問わず、この法則は普遍といってよいだろう。したがって、田園賛美をもって即俗事からの逃避と誤解した一部ロマン派の作家たちの場合、文学を神聖視せんとする彼らの傾向が強まるにつれて、ますますその文学は孤立し、貧血症に陥ったのも当然であった。

これにたいして、都会を自己の文学領域と信じて疑わなかった十八世紀の文人たちは、きわめて健全な作家本能を有していたといってよい。一七三七年に上京して以来、一七八四年に死去するまで、数度の旅行を除いてロンドンをまったく離れなかったジョンソン博士は、首都にたいする愛着の情をいたるところで語っているが、たとえばマックスウェルという牧師にもらしたという次なる感想は、作家が自己の環境について物語った言葉として、間然するところはない。

ほかのいかなる場所よりも、ロンドンにいると精神が豊かになる。ロンドンから遠く離れた所でも、肉体の楽しみは得られるかもしれない。だが、そんな所では精神が飢えてしまう。つまり、自己の機能を鍛え、切磋琢磨する機会に乏しいので、その機能が退化してしまうのだ。

指摘するまでもないことだが、腐敗せる都会を去って田園に帰ろうという思想は、ロマンティシズムをもって嚆矢とするわけではない。ウィリアム・クーパーの長詩『課題』第一巻の「田園は神の創造物、都会は人間の作れるもの」という有名な詩句は、新しき胎動、すなわちロマンティシズムの萌芽を示すものとしてしばしば引用されるけれども、もちろんその典拠は古代ローマのウァルローに発見することができる。同じく古代ローマのホラーティウスやユウェナリ

スも、都会の腐敗を主題に度々作詩し、歴史家タキトゥスもまた、ローマにおけるキリスト教の蔓延をその著『年代記』で評した際に、「この忌まわしい迷信は再び勢力を回復し、ユダヤのみならずローマにも広がった。すべての堕落せるもの、恥ずべきものは首都に集まり、首都に栄えるのである」と記している。

古典主義者である十八世紀のイギリス文人たちは、もちろんこうした田園賛美の思想にある程度の反応を示したのであって、ロンドンを深く愛し、「ロンドンに倦むことは人生に倦むことだ」と語ったジョンソン博士でさえも、首都の腐敗を描いた諷刺詩『ロンドン』によって世に出るという皮肉な現象を呈している。また、「おぞましきものよ、都会とそのあらゆる営みは」と殊勝なことをうたったヘンリー・フィールディングも、治安判事として死の直前までロンドンの暗黒街とかかわりを持った。書簡作者として知られるモンタギュー夫人によれば、フィールディングの仕事は悲惨と悪徳の掃きだめを漁るようなものだったというが、彼が自己の職務に強い使命感を抱いていたことは疑い得ない。すなわち、フィールディングにせよジョンソンにせよ、いずれも逞しい常識の所有者であって、田園賛美の思想に一応の会釈は必要だとは感じていても、心の奥底では、都会こそ自己の関心の対象であることに迷いはなかったのである。漱石が苛立ちを示したのもここに原因があり、十八世紀文人たちのこうした懐疑の欠如は、漱石の目には無反省な自己満足として映ったに違いない。

（2）

都会を自己の活動領域と認識する点において、スウィフトもまた同時代人たちと変わりはなかった。彼が古今を絶する諷刺家であることに誰も異論はないだろうが、諷刺こそはまさしく塵埃にまみれたところに誕生するのであって、そ

の意味で典型的な都会の文学だからである。すなわち、諷刺家はいかなる悪徳を作品の主題に取り上げるにせよ、自己の体験に基づいて題材を選択しており、抽象的にその悪徳を想像したりはしない。その場合、現実の悪徳と作家とのかかわりが大きければ大きいほど、作品の力強さは増すのである。この事実を証明するものとして、スウィフトほど適切な例はほかにない。七十余年にわたるその長い生涯において、彼の著作は散文十四巻、詩集三巻の多きにのぼるが、その尨大な作品のひとつひとつが、すべて現実の悪徳とのかかわりより生まれており、一般論に終始して見えるような場合でも、作者は必ず具体的な事例を思い浮かべているのである。スウィフトは『桶物語』で、「人類の有する徳は五指を屈するに足りないが、悪徳や愚行は数限りなく、時とともに増してゆく」と述べたが、そうした無数の悪徳を彼が発見したのは、いうまでもなく都会においてであった。

スウィフトが同時代の文人たちと異なるのは、田園賛美の思想から脱却するのに、精神的迷いと成長とを必要とした点である。この思想は、フィールディングやジョンソンにとっては、単に通り一遍の会釈を払う対象に過ぎなかったが、スウィフトの場合、はるかに重要な意味を持っていた。というのは、若きスウィフトの身辺に、ローマ以来のこの理想を体現する人物が存在したからである。もちろん、スウィフトの庇護者サー・ウィリアム・テンプルを指すのであるが、両者の関係は、これまで必ずしも十分な考察がなされてきたとは言い難い。スウィフトが二十代の前半から十年近くをテンプルの秘書として過ごし、世に出るのはテンプルの死後、すなわち既に三十代半ばに近かったことを思えば、伝記作者のこうした怠慢はまことに遺憾であり、その結果、彼の伝記が歪められているともいえるのである。

スウィフトとテンプルの関係について、従来正当な理解が妨げられてきたいまひとつの原因は、伝記作者が猟奇的な興味に走り過ぎたという事実が挙げられよう。スウィフトが後年ステラと仇名することになるエスター・ジョンソン

は、彼の恋人とも友人ともつかぬ不思議な存在であるが、一六八九年、彼がはじめてテンプルの家を訪れたとき、いまだ八歳の少女で、同家に養われていた。ステラがテンプルの私生児だという噂は、彼女の生前から流れていたらしく、一七二三年、ミースの主教が手紙で触れている。その後、一七五七年の『ジェントルマンズ・マガジーン』の記事を皮切りに、サッカリーの『十八世紀ユーモア作家列伝』を経てこの噂は伝えられ、二十世紀にいたっても、たとえばエミール・ポンスの著書が示しているように、いまだ完全には否定されていない。さらにスウィフト自身についても、彼をテンプル、あるいはテンプルの父サー・ジョン・テンプルの私生児とみなす突飛な説が存在し、これを唱える人々は、スウィフトがテンプルの家に身を寄せることになった事情をこの説によって解釈しようとする。こうした臆説の当否をいま論ずる余裕はないが、なによりもテンプルの人柄が、この臆説を信じ難くさせていることを指摘しておきたい。この場合、スウィフト自身の言葉に素直に従ってよいのであって、ことさら空想をたくましくする必要はない。スウィフトは『ジョンソン嬢の死』で、「彼女の生まれは誇るべきものはほとんどない」と記しているが、事実、ステラはテンプル家の召使の娘というのが真相であった。また、テンプルとスウィフトとの関係についても、神秘的な事情は一切存在しない。テンプルの父サー・ジョン・テンプルがスウィフト一族を庇護したことから両家の関係が始まるのであって、スウィフトだけでなく、従兄のトマス・スウィフトも一時期テンプルの秘書を勤めている。スウィフトも『自伝断章』で、「サー・ウィリアム・テンプルの父が私ども一族の親しい友人であった」と記しており、テンプル自身も、「以前から一族の者たち全員と交際がありました」と手紙で述べて、スウィフトとの関係が個人的なものではないことを明確にしているのである。ここで強調したいのは、伝記作者たちがこうした興味本位の推測に耽り過ぎた結果、テンプルその人にたいする正当な評価がなおざりにされたという事実であって、先に触れたように、ひいてはスウィフト自身の実像

にも歪みが生じているのである。

現在テンプルの名が記憶されるとすれば、第一にスウィフトの庇護者として、第二にドロシー・オズボーンの夫として、第三に『古代と現代の学問について』というエセーの作者としてであろう。テンプルの生前の名声を思えば、こうした消極的な理由で後世に名が伝えられるのは、同時代人には信じ難いことに違いない。テンプルは外交官、政治家、文人として、イギリス国内のみならず大陸にまで令名をうたわれ、官を退いてのちは、名利にとらわれぬ賢者、当代随一の洗練された紳士として称えられた。書簡作家として知られるチェスターフィールド卿と、生き方においても思想的にも共通するところがあるが、死後、名声が凋落した点でも多分に似通っている。十八世紀から現代にいたるまで、度々著作集が出版されているのを見ても、テンプルにたいする興味がけっして失われていないことがわかるが、彼を真剣な批評の対象として取り上げることに、人々が躊躇を覚えたのは事実である。これについては、やはりその原因はマコーリーの『サー・ウィリアム・テンプル論』に求めるべきだろう。マコーリーの代表作といえば、名誉革命を主題とするあの浩瀚な『英国史』ということになるが、むしろ彼の本領は、テンプルやフランシス・アッタベリーなど、周辺の人物を描いたポルトレに発揮されている。マコーリーにとって、テンプルは手頃の題材と感じられたに違いない。彼はその題材を自家薬籠中の物とし、テンプルの像を巧みに矮小化することに成功した。マコーリーの批判は二点に要約できるのであって、政治家としてテンプルは小心に過ぎ、作家としては素人の域を出なかったということになろう。後者の批判については、あるいは同じ文人政治家として、近親憎悪に類するものをマコーリーは感じていたのかもしれない。いずれにせよ、生き生きした力強い文章によって提供されるそのテンプル論は、すこぶる説得力に富んでおり、テンプルの名声失墜に大きく貢献した。マコーリーの見解は、サッカリーの『十八世紀ユーモア作家列伝』に取り上げら

れて一般に定着し、さらにイーディス・シットウェルの伝記小説『黒い太陽のもとに』に受け継がれることになる。

一般的にいって、伝記文学は正当に評価するのが困難なジャンルである。伝記が説得力を有するには、複雑な対象を単純化することに成功した場合であり、したがって、優れた伝記であればあるほど、実像から遠ざかるという矛盾した現象を呈するからだ。その適例がストレイチーの『ヴィクトリア女王伝』で、同じ主題を扱ったエリザベス・ロングフォードの著作といずれが優れているかは、もちろん言をまたない。だが、女王の実像はむしろロングフォードの伝記にうかがえるのである。同じ批判がマコーリーにも当てはまるのであって、彼の『テンプル論』はやはり公平を欠くといってよいだろう。以下に、テンプル再評価の一端として、彼の生涯を簡単に記したあと、スウィフトにおよぼした影響の跡をたどってみたい。スウィフトにとってテンプルの影響から脱却することは、すなわち作家としての自己の確立を意味したのである。

（3）

サー・ウィリアム・テンプルは一六二八年に生まれた。テンプル家は代々アイルランドと関係が深く、先に触れたように、父のサー・ジョン・テンプルは同国の高官としてスウィフト一族を引き立てている。テンプルの嫡系は絶えたが、甥の初代パーマストン子爵の子孫に、ヴィクトリア女王時代に二度首相となり、クリミア戦争を指揮した有名なパーマストンが出ている。一六四四年、テンプルはケイムブリッヂ大学に入学したが、一六四七年、学位をとらずに大学を去っている。翌年、大陸旅行に出発し、その途中ワイト島で、未来の夫人となるドロシー・オズボーンに出会った。二人の結婚には双方の家から異議が出されたらしく、結局、両者が結ばれるのは一六五四年のクリスマスである。この

長い婚約時代にテンプルに宛てたドロシーの書簡が十九世紀に公表され、彼女の名は一躍有名になった。ルーシー・ハッチンソンやニューカースル公夫人の著作と並んで、ドロシー・オズボーンの書簡集は、この時代の女性の心情を伝えるものとして高く評価されている。

テンプルは長男ジョンの誕生後、一六五六年、アイルランドに移ったが、王政復古後にイギリスに戻った。外交官として活躍し始めるのは一六六五年からで、一六六八年、ハーグ駐劄のイギリス大使に任ぜられている。テンプルの最大の業績は、同年に締結された三国同盟であるが、これはフランスの進出を阻止するのを目的として、イギリス、オランダ、スウェーデンのあいだに結ばれた防御協定で、失政の多かったチャールズ二世の治下に、国民のあいだにすこぶる評判が良かった。ドライデンが諷刺詩『アブサロムとアキトフェル』で、〝国家安寧の支柱〟と称えたのがこの同盟である。その締結にあたってテンプルの果たした役割のいかに大きかったかは、ヴォルテールが『ルイ十四世の世紀』に記しているが、これはテンプルの名声が国際的であったことの証左でもあるから、その一部を以下に引用したい。

この大使がまたひとかどの思想家で、文学と政治を切り離しては考えぬ。主教のバーネットには無神論者と謗られたものの、見上げた人格の持主だ。穏健な共和主義者たる天禀を備え、自由の地というのでオランダを祖国のように熱愛、この自由を信条とする点では、オランダ宰相にさえひけをとらぬ。（岩波文庫訳）

主教のバーネットに無神論者と謗られたというのは、ギルバート・バーネットの著書『同時代史』の一節を指すが、これについてはスウィフト自身が自己の蔵書の欄外に、「サー・ウィリアム・テンプルは有徳の人で、バーネットは彼

の人柄にはまったく無知だった」と記している。

三国同盟は内外で好評を博したものの、一六七〇年、イギリス国王はオランダ侵略を意図した秘密協定をフランスと結び、イギリスの外交政策を百八十度転換させた。テンプルはその後も外交官として活躍を続けるが、宮廷にたいして不信を抱いたであろうことは想像に難くない。チャールズ二世は二度にわたって国務大臣の地位を提供したが、テンプルはこれを断り、一六八一年、五十三歳で政界を退いた。これを見ても、テンプルが権力に恋々とするのを潔しとしなかったことがわかるが、国務大臣の地位を固辞したことは、彼にとって心の記念にはなったらしい。側近にあってそのことを度々聞かされたスウィフトは、後年『ステラへの日記』で苦々しげに思い返している。

あの頃の私は、サー・ウィリアム・テンプルが五十歳で国務大臣になったかもしれないというので、ひどく尊敬したものだった。だが、私のいま親しくしている青年（ボリングブルックを指す）は、三十歳になるかならずの年令で、既にその職にあるのだ。

一七一〇年十一月十一日

外交官時代のテンプルのいまひとつの功績は、オレンヂ公ウィリアムと王弟ヨーク公ジェームズの長女メアリとの結婚を取り計らったことである。一六八八年の名誉革命は、両者の結婚を基礎としており、革命後、二人はそれぞれウィリアム三世、メアリ二世として共同統治にあたることになるから、テンプルがイギリスの政治におよぼした影響は、三国同盟の場合よりはるかに大きかったといってよいだろう。

テンプルは引退後、リッチモンドに近いシーンに暮らし、一六八六年、サリー州のムーア・パークに移って田園生活に専念した。一六九四年、テンプルを訪れたあるスイス人は、ムーア・パークの生活を次のように記している。

私は彼の家を訪問して、隠遁生活の理想の姿を発見した。ロンドンから遠いので来客に煩わされることもなく、空気は澄み、土地は肥えている。主人は俗事から解放され、野心に悩むこともない・・・その結果、ムッシュー・テンプルは健康で快活なのだ。老齢と痛風に苦しんではいるものの、一緒に散歩をしたときは、私の方が先に疲れてしまった。

先に触れたように、腐敗せる都会を去って田園に帰ろうという、古代ローマ以来の理想をまさしく実現した形であるが、テンプル自身にもその自覚の存在したことは、たとえば『エピクロスの庭について』と題するエセーの記述が示している。

余は青年時代より田園生活に惹かれており、老年にいたってそれが唯一の楽しみとなった。誓っていうが、偶々余がこれまで与かった世俗の栄光は、みずから求めたものではけっしてない。むしろ余としては、自由に振る舞うことのできる私人の生活を念願してきたのである。

もっとも、〝理想の田園生活〟を営んでいるとはいえ、晩年のテンプルは寂莫を禁じ得なかったに違いない。夫人と

のあいだに生まれた九人の子供は、長子のジョンを除いてすべて夭折し、そのジョンも、一六八九年、二人の幼い娘を残してみずから命を断った。スウィフトがはじめてテンプルの許に身を寄せたのは、ジョンの自殺からまもなくのことである。夫人のドロシーは一六九五年に亡くなり、テンプル自身も一六九九年に死去した。

テンプルの著書は、『オランダ共和国管見』、『イギリス史序論』、『政体の起源とその性格』など、政治に関するものと、人生観、文学観、完教観などを記したモンテーニュふうのエセーとに分けられるが、文学史上もっとも名高いのは、『古代人と現代人の学問について』というエセーであろう。これは当時フランスでおこなわれていた古今優劣論争を取り上げた作品で、このエセーをきっかけにイギリスにも一連の論争が起こり、十七世紀末の文壇を賑わせた。もっとも、論争の経過はテンプルにとって名誉あるものとは言い難い。というのは、彼が賞揚したファラリス書簡の偽物であることが、古典学者のリチャード・ベントリーによってはっきり指摘されたからである。だが、論争がファラリス書簡の真偽に集中したことは、テンプルにとって本意でなかったに違いない。テンプルの意図は、現代人の驕りに警告を与えることであり、その意味で、彼は進歩の概念に懐疑を示した最初の思想家といえるのである。

だが、イギリス文学にたいするテンプルの貢献は、むしろその優れた文体にあった。この時期の英語が簡潔明晰なものへと変化したことは、たとえばドライデンとミルトンの散文を比較すれば一目瞭然であるが、そうした英語の確立に寄与した作家の一人として、我々はテンプルを数えることができるのである。自身完璧なスタイリストであったスウィフトは、みずから編纂したテンプルの書簡集の序文で、次のように述べている。

この著者が国語をほとんど完全の域にまで押し上げたことは、既に一般の認めるところである。だが、彼がいか

に見事な国語の使い手であるかは、書簡集においてこそ最もよく表われている。

テンプルの散文を称えたのは、スウィフト一人に限らなかった。ポープが熱烈な礼讃者であったことは、ジョゼフ・スペンスの『逸話集』が記しているし、またジョンソン博士も、自分がテンプルの文体に学んだことをボズウェルに語っている。

（4）

スウィフトがはじめてムーア・パークのテンプルの家に身を寄せたのは一六八九年であるが、翌年にはアイルランドに帰っている。健康を害したのが原因だと『自伝断章』に記されてはいるものの、実際には職を求めるのが目的だったらしい。だが、就職運動は効を奏さず、一六九一年、再びテンプルの許に戻り、一六九四年まで滞在した。スウィフトがこの年の五月に再度ムーア・パークを去ったのは、テンプルとの衝突が原因であるが、これについては後に触れることにしたい。十月に按手礼を受けて正式に僧職に就き、翌年、北アイルランドのキルルートに牧師として赴任した。同地に滞在中、ジェーン・ウェアリングという女性に結婚を申しこんでいるが、思わしい返事が得られず、一六九六年、三度テンプルの許に帰り、以後、一六九九年にテンプルが死去するまで、ムーア・パークに彼の秘書として留まることになる。

スウィフトにとって、ムーア・パークでの生活がきわめて屈辱的なものであり、召使同然の扱いを受けたとは、伝記作者が一様に説くところである。スコットもマコーリーもこれに触れているが、なかでも名高いのが『十八世紀ユーモ

ア作家列伝』の記述で、「ルシファの如く尊大な男がその膝を屈し、鞠躬如して奥方の御機嫌をうかがい、主人の走り使いをした」とサッカリーは述べている。彼が典拠とした『ステラへの日記』の一節は、必ずしもスウィフトが召使同然の扱いを受けたという証左とはいえないけれども、注目に値する文章には違いない。

私は大臣（ボリングブルックを指す）に、私にたいして素気ない態度をとるのはやめろと警告してやった。小僧扱いされて黙っていられるか。既にそうした扱いは、サー・ウィリアム・テンプルの許でうんざりするほど体験した。たとえ大臣であろうと、私と交際する以上、なにか気に入らぬことがある場合はその旨をはっきり言ってほしいのだ。急に態度を変えたり、冷たい顔を見せたりして、その理由をこちらに推測させようなどというのは、真っ平御免こうむりたい。相手が王冠をいただく身であろうと、私はそんな態度を許しはせぬ。

一七一一年四月三日

昨日、私が大臣にたいしてはっきり警告してやったのは、あれでよかったと思う。君は覚えているか。サー・ウィリアム・テンプルの機嫌が悪いときなど、私がどんなに心配したかということを。どうして機嫌が悪いのだろうと、色々その原因を推測しては心を痛めたものだった。

四月四日

しかし、テンプルの人格や業績について語るとき、スウィフトが常に敬意をもって臨んだことを忘れてはならない。

テンプルの遺作である『書簡集』、『第三雑文集』、『回想録』などに添えられたスウィフトの序文は、いずれも文人としてのテンプルを高く評価しており、また、テンプルの死後まもなく書かれたと思われる覚書がスコットの『スウィフト伝』に引用されているが、そこでもテンプルは最大限に賞揚されている。ムーア・パークでの生活が、後年のスウィフトにとって必ずしも快い思い出とはならなかったのは事実としても、彼の体験したという〝屈辱〟を過大視するのは、やはり誤りといってよいだろう。それに、青年時代のスウィフトとテンプルの関係については、後年の回想よりも、むしろスウィフト自身のこの時期の発言こそ、多くの真実を伝えているのである。

テンプルと知り合った当初、スウィフトが心から彼を崇拝したことは、たとえば一六九二年頃の作と推定される『サー・ウィリアム・テンプル頌詩』が示している。その後、感情の齟齬をきたし、一六九四年にアイルランドへ去ったことは既に述べたが、衝突の直接の原因はスウィフトの就職問題であった。彼は一六九二年十一月末に叔父に宛てた手紙のなかで、テンプルが自分を手離したくないせいか、就職問題に熱心ではないとこぼしている。それから約一年半後、スウィフトは独立を決意してテンプルの許を離れるのであるが、このときテンプルがひどく立腹したことが、従兄のディーン・スウィフトへの手紙に記されている。だが、世間はスウィフトの予期したほど甘くはなく、テンプルの推薦状がなければ僧職に就けないことが明らかになった。スウィフトは辞を低くしてテンプルの許しを乞い、寛大なテンプルは直ちに推薦状を送っているが、このときのスウィフトの手紙は、厖大な彼の書簡のなかでも特に有名である。

だが、スウィフトが一六九四年にムーア・パークを去ったのは、単にテンプルから物理的に離れたというだけでなく、作家としての自己の確立を意味していた。彼の文学的資質が諷刺にあることはいうまでもないが、一六八九年、はじめてテンプルを訪れた当時は、いまだ自己の資質を自覚していない。スウィフトが早熟の天才ではなかったことがし

ばしば指摘されるけれども、テンプルと交わることにより、彼の自己発見はさらに遅れたといってよいだろう。というのは、テンプルの文学観は、『詩について』というエセーが示しているように、諷刺にたいしてきわめて懐疑的だったからである。

令名あまねきテンプルの側近に侍して、若きスウィフトが自己を見失ったとしても不思議ではない。一六九二年、従兄のトマス・スウィフトに宛てた手紙で、「私は現今のいかなる作家の作品よりもサー・ウィリアム・テンプルの著作を好む。これはほとんど自己愛といっていいね。互いに気質が似通っているものだから、自分の作品のように感じられるんだよ」と記しているが、これを見ても、当時のスウィフトがいかにテンプルに傾倒していたかが察せられよう。彼はテンプルの示唆するまま、自己の資質に合わぬピンダー風の頌詩を作り、これまたテンプルの思想を鵜呑みにして、田園生活を賛美すると同時に、詩人の任務は悪徳の追求ではなく、むしろ人間の善を称えることだと説いた。『サー・ウィリアム・テンプル頌詩』や『アシーニアン協会頌詩』は、テンプルの忠実な使徒たるスウィフトを象徴する作品である。

テンプルにたいするこうした心酔は、一六九三年の末頃まで続いたと考えられる。『コングリーヴ氏に与える詩』は、劇作家として名声を博しつつあった年少の友ウィリアム・コングリーヴに、都会を去って田園に帰ることを勧めた詩であるが、その忠告とは裏腹に、むしろ作者自身の心の迷いが読みとれるかもしれない。スウィフトの心境の変化と自己の確立とがはっきり表われるのは、この年の末に書かれた『サー・ウィリアム・テンプルの快癒に寄せて』と題する詩であろう。彼はこの詩で珍しくドロシー・テンプルに触れており、彼女の書簡の読者にはその意味でも興味深いが、もちろん最も重要なのは、作者がこれまでの自己の作詩をすべて迷妄として斥け、田園賛美の思想ときっぱり訣別してい

る点である。スウィフトは『桶物語』で、「幸福とは上手に欺されている状態の連続をいう」と述べたが、迷妄から覚めたいま、これまでのムーア・パークでの生活は、まさしくその意味で〝幸福〟と感じられたに違いない。スウィフトは、翌一六九四年にムーア・パークを去ったあと、一六九六年、三度テンプルの許で過ごすことになるが、もはや自己の文学領域に関して迷いはない。テンプルにたいする敬意は生涯失わなかったけれども、自分とは歩む道の異なることをはっきり自覚していたのである。そして、この三度目のムーア・パーク滞在の成果が、代表作『桶物語』であった。